

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301  
 研究種目：研究活動スタート支援  
 研究期間：2015～2016  
 課題番号：15H06294  
 研究課題名(和文) カレン難民の移動と定住をめぐる日常生活実践 映像ドキュメンタリー制作に伴う考察  
  
 研究課題名(英文) The Daily Living Situation Among Myanmar Refugees Following Resettlement-Observations Based on Production of Documentary Film  
  
 研究代表者  
 直井 里予 (NAOI, RIYO)  
  
 京都大学・東南アジア地域研究研究所・機関研究員  
  
 研究者番号：50757614  
  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：2年目の平成28年度は、アメリカ・サウスダコタ州でのフィールドワークを実施し、第三国定住をめぐる日常生活実践の調査を行った。ドキュメンタリー映画制作における参与観察に伴う考察を行い、難民キャンプにおける日常実践との比較を行った。そして『夢の終わりーOur Life 2』という作品を完成させ、大学の講義や研究会のみならず、アメリカでも撮影対象者向けに上映した。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research is to examine the daily living situation (e.g., living quality, family issues) among Myanmar refugees, especially children, living in a refugee camp and in the resettlement country through observations gained from a documentary film (images and narrations).

This research was conducted at South Dakota in the United States, where approximately 2500 Karen refugees have been resettled in the second year (H28). The analysis results were made into a documentary film "OUR LIFE 2 - Part1 The End of My Dream", and the film was shown for Karen refugees in the United States.

研究分野：地域研究

キーワード：映像ドキュメンタリー 難民 日常生活実践 第三国定住 東南アジア カレン難民 タイ ビルマ

## 1. 研究開始当初の背景

多数民族ビルマ人主体の中央政権ビルマでは、多数民族ビルマ人主体の中央政権とカレン人など少数民族の間で 60 年以上も内戦が続いた結果、約 14 万人のビルマ難民（その内約 12 万人がカレン人）が、国境地帯にある 9 箇所のキャンプで暮らしている。そんな中、2011 年の内戦停戦後の国内の民主化の動きにともない、関係機関による難民の帰還の話しあいが始まった。

本研究（「カレン難民の移動と定住をめぐる日常生活実践—映像ドキュメンタリー制作に伴う考察」）において、カレン難民の日常生活実践に着目した背景には、ビルマ政府の民主化に伴い難民の帰還への動きが始まる中、難民の日常生活実践を通じた社会関係に関する議論は充分に行われていないことがあった。

これまでのビルマ難民に関する先行研究は、難民たちの置かれている状況を政治的対立や民族問題から切り取ったもの [South 2008] や〈難民〉を生み出す構造の理論化 [久保 2014] が主で、難民の個々の日常生活の考察は充分に行われてこなかった。また、カレン人が難民キャンプ、さらに第三国再定住地で、どのように日常生活を送りながら社会関係を形成しているのかを通時的に考察した研究は乏しい。

そこで、日常生活実践の変容に着目し、ビデオ撮影の手段を用いたフィールド調査、市場経済の波が押し寄せはじめ文化や生活習慣などに急激な変化がおきている難民キャンプ、第三国の定住地、またキャンプ閉鎖後の難民たちの日常生活実践の変容を考察することを試みた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ビルマ・タイ国境における難民キャンプ及び、第三国の定住地で生活する難民の移動と定住をめぐる筆者が自ら作成したドキュメンタリー映像とその制作を事例に、

(1) ドキュメンタリー映像の対象となったカレン人難民の日常生活実践を明らかにすること。

(2) ドキュメンタリー映像がその対象とした事象をいかにとらえうるかを自己再帰的に考察し、ドキュメンタリー作品制作における撮影・編集・上映の諸段階を通じた「撮る者—撮られる者」の関係の動態を分析し、それをリアリティ表象における映画作成者の視点を論じることである。

すなわち、本研究は、難民の生活実践と社会関係の動態の議論と、それを映像で表象することに関する考察との二重の構造となっている。

具体的には、本研究では、タイ北西部に位

置し、約 4 万人もの難民が暮らしているメラ難民キャンプと第三国再定住地を中心にフィールド調査を実施する。研究主題を巡る課題は、以下の通りである。

### (1) カレン難民の日常生活実践

①難民キャンプで生まれ育ち、母国を知らない若い世代の難民たちは、キャンプを出て第三国に再定住後、新たな土地でどのように日常生活を送りコミュニティを形成しているのか。

②母国を追われて難民キャンプに長年閉じ込められてきた年長者たちは、キャンプ閉鎖後、祖国でどのように新たな関係を築いていくのだろうか。

本研究では、申請者が 2008 年から制作を継続しているカレン難民に関するドキュメンタリー映画の主人公である難民キャンプ生まれの D 君（撮影開始当時 14 歳、現在 21 歳）と家族の日常生活と社会関係の変化を中心に考察する。D 君の第三国再定住地（2013 年 12 月渡米）のインディアナ州インディアナポリスでの生活実践と彼を取り巻く約 500 人のカレン難民コミュニティを通して、難民が定住先でどのように新たな関係を築きコミュニティを形成しているのかを考察する。

さらに、難民キャンプに残った D 君の両親はキャンプ閉鎖後、どこへ行くのか。祖国に戻るのか、タイに留まりつづけるのか。難民たちは何を拠り所として、新たな土地でどのように新たな関係を形成し生活を送っていくのか。キャンプ閉鎖後の日常実践と関係の形成を考察する。

### (2) 映画制作者の視点

映画制作のプロセスを反省的に考察し、ドキュメンタリーにおける〈リアリティや現実〉を、映画制作過程において生成されるものとして捉え、ドキュメンタリー制作者としての立場からその生成プロセスを明らかにする。具体的には、

①カメラがカレン難民の生活空間に入り込むことにより、彼らの日常生活にどのように影響し、撮影者と撮影対象者の言語行為と身体的コミュニケーションから現実がどのように立ち上がったのか。

撮影者の視点と被写体の視点が交錯する中で〈現実〉が生起する過程に着目し、撮影者と被写体の関係性が撮影中に揺れ動きながら生成するプロセス、さらに固定的でない関係のダイナミクスを考察したうえで、そうした動的な過程をいかに映像によって捉えることが可能かという制作上の実践的課題について論じる。

②編集作業がどのように作品に影響するか。

③上映を通して、作品が観る者のリアリティ認識にどのように形成したのか、撮影・編

集・上映を通して映画作成者の視点の関与問題を論じる。その際、ビデオカメラという既成の機械と撮影者によるその操作との相互作用から創出される〈現実〉構成の過程に着目する。

### 3. 研究の方法

本研究は、カレン難民の日常生活実践の分析と映像制作における視点を明らかにするため、歴史的・政治・経済的なコンテキストの明示化と実践の両面から生活実践の変容と視点を検討した。そのために、まず、文献調査による歴史的・政治・経済的なコンテキストの明示化を行った。

具体的には、マクロ的なコンテキストの理解、及びフィールドワークにむけた情報収集。そして、現地資料を通じた検討、などである。

次に、ビルマ国内、ビルマ・タイ国境、第三国再定住地における難民たちの生活実践の分析や生活実践に繋がる傍証収集を行った。具体的には、以下の現地調査を実施した。

#### (1) 現地調査の実施

##### ①2015年11月

ビルマ国内のミャワディー及びビルマ・タイ国境に位置するメラ難民キャンプでの聞き取り調査と文献調査。

##### ②2016年10月～11月

バンコクのチュラロンコン大学及びタイ国立図書館にて文献調査。

##### ③2017年2月～3月

アメリカのサウスダコタ州カレン難民コミュニティでの聞き取り調査と文献調査。

#### (2) 映像収集と編集及び分析作業

さらに、ビデオカメラによる撮影を行い、約40時間の映像を資料として集め、半年間の編集作業を経て、75分のドキュメンタリー映画作品としてまとめた。

①ビルマ国内のミャワディー及びビルマ・タイ国境に位置するメラ難民キャンプでの映像約20時間の収集。

②アメリカのサウスダコタ州カレン難民コミュニティにおける映像約20時間の収集。

(3) 映像上映後における映画に関するディスカッションを分析した。対象は、以下の4つの上映後における記録である。

①龍谷大学における講義内、約30名の学部生対象。2016年5月。

②「スーパーグローバルハイスクールプログラム(大阪府立三国丘高等学校)集中講義内、約20名の高校生対象。2016年3月、及び2017年3月。

③神戸シルバーカレッジにおける講義内、約60名の生徒対象。2016年12月。

以上の現地調査、映像収集・映画制作及び映

画上映により、研究を行った。

### 4. 研究成果

本研究の実施期間(2015～2017年)は、ビルマ国内でのテインチョーを大統領とする新政権の発足や、アメリカのトランプ政権誕生など、様々な政治的な動きがあった。ビルマの民主化に伴い、ビルマ政府とタイ政府は、難民の帰還への協議を開始し、2020年にはキャンプを閉鎖する方針を打ち出し、難民帰還を2016年10月からはじめた。アメリカ政府は、ビルマ人の第三国定住を終了する声明を発表し、難民の入国を一時禁止する処置をとった。

こうした背景を受け、難民コミュニティでは、構成員や世代が入れ替わり、それに応じて人間関係や日常生活なども変容していった。明らかになった点をあげれば、以下の通りになる。

アメリカにおける第三国定住の終了とタイ政府による難民キャンプ閉鎖の声明に伴い、渡米を決意する難民が増加した。それに伴い、アメリカからの難民キャンプへの仕送りが増え、スマートフォンやTVなどがキャンプ内に一気に入り込んだ。

FacebookやLineなどで連絡を取り合い情報交換し、第三国定住地における仕事や生活に関する情報を得ることにより、難民の第三国への移動は、更に加速した。そして、第三国定住地でも、キャンプ地と同様に、難民たちは、スマートフォンなどで情報を取り合い、家族や友人たちから仕事を斡旋して貰いながら、アメリカ国内において第2次移住をする難民が増加した。

さらに、タイやビルマを離れていながら、故郷の情報も、第三国へと流れている。カレン州で撮影された映像などが、YouTubeなどでアップされ、カレン難民の間でシェアされる。故郷へ帰国するか否か、民主化されたビルマの情勢をカレン難民たちは、FBを頼りに、情報を探る

スマートフォンにより情報が容易に手に入る時代になり、情報量が増加した分、選択も多岐に渡るようになった。そうした中で、難民は、以前にも増し、信頼できる身内の情報を頼りに、仕事と安全性を求めて移動を続けている。内戦という自国の政治情勢に翻弄されてきた難民だからこそ安全性を第一に考え、大都会よりも時給が低いが比較的安全な地方の町を選ぶ。薬物などの恐ろしさを身近で体験も背景にあるだろう。移動と定住をめぐったカレン難民の繋がりは、スマートフォンに依存しつつ、大都市のコミュニティから、地方の町へと多岐に広まっている。

一方で、難民キャンプにおいては、家族の離散が進んだ。難民キャンプに残された高齢者たちは、カレンの伝統的な生活を営み続ける中、アメリカへ第三国定住した若い世代の

難民たちは、教会における活動を中心にネットワークを形成しつつ、SNS などによるコミュニケーションツールを活用し、職場においても、家族や親族ネットワークを超えたカレン人同士の関係性を築きながら、日常生活を実践していることが明らかになった。

以上、難民コミュニティでは、第三国定住や本国帰還への動きにともない、構成員や世代が入れ替わり、それに応じて日常生活実践や人間関係も次々に変容している。このような環境下で、難民は、家族間、カレン同士間、カレン以外の人々との間に、関係性を重層化させ、家族内、カレンという枠組み、カレン外、及び、ライフコースに応じ、他者との関係性を重層化していることが明らかになった。

なお、調査は継続中であり、今後は、難民帰還に伴うカレン難民の移動と定住に関するドキュメンタリー映画を制作し、『夢の終わり—OUR LIFE 2 第一部』の続編である『故郷—OUR LIEF 2 第二部(仮)』をまとめる予定である。

本研究でまとめた、『夢の終わり—OUR LIFE 2 第一部』は、現在は、撮影対象者と大学などでの内部上映のみ行っているが、調査終了後は、第一部と第二部を合わせた形で一般公開し、上映に関する分析を進めながら、論文・国内外での学会発表、さらに単行本の出版へとつなげていく予定である。

#### <引用文献>

- ①South, A. Ethnic politics in Burma: States of conflict. Routledge. 2008.
- ②久保忠行. 『難民の人類学：タイ・ビルマ国境のカレン—難民の移動と定住』清水弘文堂書房、2014、356p.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[その他]

ホームページ等

「OUR LIFE 2」

<http://www.riporipo.com/ourlife2/index.html>

なお、成果広報及び教育の一環として、以下の題目、日時、場所で講演と上映(質疑応答)を行った。

- ①直井里予 「スーパーグローバルハイスクールプログラム(大阪府立三国丘高等学校)集中講義：多様な考え—グローバルな場でのコミュニケーションのために(映像から東南アジアの現状を学ぶ)」(『夢の終わり—OUR LIFE 2 第一部(仮編版)』上映

あり)、2017年3月8日、於：京都大学稲盛財団記念館、京都市。

- ②直井里予 「映像で見つめる東南アジア—ビルマ難民の移動と定住」(『夢の終わり—OUR LIFE 2 第一部(仮編版)』の上映あり) 2016年12月1日、於：神戸シルバーカレッジ、神戸市。

- ③直井里予 「スーパーグローバルハイスクールプログラム(大阪府立三国丘高等学校)集中講義：多様な考え—グローバルな場でのコミュニケーションのために(映像から東南アジアの現状を学ぶ)」(『夢の終わり—OUR LIFE 2 第一部(仮編版)』上映あり)、2016年3月9日、於：京都大学稲盛財団記念館、京都市。

- ④直井里予 「映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」京都大学アカデミックデイ2015、(『夢の終わり—OUR LIFE 2 第一部(仮編版)』一部上映あり)、2015年10月4日、於：京都大学、京都市。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

直井里予 (NAOI RIYO)

京都大学東南アジア地域研究研究所・機関研究員

研究者番号：50757614